

音楽科授業の特質をふまえた逐語記録に基づく授業分析における記述手法の検討

—逐語記録への非言語情報の結合の観点より—

横山 真理¹

(1: 幼児教育学科)

要 約

本研究は、逐語記録への非言語情報の結合の観点から、音楽科授業の特質をふまえた逐語記録に基づく授業分析の記述手法について先行研究を検討し、研究の到達点と課題を明らかにすることである。

研究の結果は、次のとおりである。先行研究は、音楽科授業の特質をふまえて言語情報と非言語情報の両方を分析するために、ビデオカメラを用いて撮影された映像記録を重要視してきた。映像記録は直接的に分析されるのではなく、逐語記録として転記され、逐語記録が詳細に分析される。しかし、映像記録の中の非言語情報を逐語記録の中に転記することは容易ではない。なぜなら逐語記録としての記述は言語情報に焦点をあてるからである。現在に至るまで、非言語情報を逐語記録と組み合わせる観点からの先行研究はほとんどない。したがって、音楽科授業を分析するためには非言語情報を逐語記録と組み合わせる記述手法の開発が必要である。さらに、非言語情報を逐語記録と組み合わせて記述した、音楽科授業分析における様々な開発事例を蓄積することが重要である。

キーワード： 音楽科授業、逐語記録に基づく授業分析、記述手法、非言語情報

(2016. 9. 23 受稿 査読審査を経て 2016. 10. 21 受理)

1. 研究の目的

(1) 研究の背景

音楽表現活動が中心となる音楽科授業では、話す・擬音語で表す・書く等、教師や子どもの発言・記述等による言語表現と、口ずさむ・音を鳴らす・身振り手振りや音楽の抑揚を表す・メロディーラインを線で描画する等、音楽・身体・描画等による非言語表現が組み合わさっている。

このように、音楽科授業は言語表現と非言語表現が組み合わさっているという特質を有していることから、音楽科授業を研究対象とした授業分析においては、音楽表現活動を言語及び非言語の統合的な情報として把握できる、ビデオカメラを用いて撮影された映像記録¹⁾が重要視されてきた。そして、映像に記録された諸情報を文字化して逐語記録を作成し、逐語記録を分析の基礎資料とした授業分析の方法が定着してきた²⁾。

授業分析で用いられる逐語記録とは、「授業者の発問・説明・指示、学習者の発言等、授業の言語的な内容を、文字化して詳細に記述したもの」(大谷 2000)と定義されている。逐語記録に基づく授業分析を行う場合、その研

究過程は、授業実践をビデオカメラで撮影し映像記録を作成する第一段階、映像記録を逐語記録として転記する第二段階、逐語記録を中心にその他の資料を合わせて分析した結果と解釈を記述する第三段階、の三段階(以降、「三段階」と略称)に分けることができる。

映像記録を逐語記録として転記する第二段階において注意しなければならないことは、映像記録を丁寧に観察し、関わり合い学び合う教師や子どもの諸活動の様相をできるだけ捨象せず詳細に逐語記録として記述することである。特に、言語表現と非言語表現が組み合わさっている音楽科授業の様相を可能な限り逐語記録に反映させ分析資料とするには、言語情報を中心に転記した従来型の逐語記録に創意工夫を加えることが必要になってくる。

しかし、逐語記録というのは教師や子どもの発言・記述等の言語情報を中心に転記した内容であるため、逐語記録における教師や子どもの言語表現を、逐語記録に反映させることが難しい非言語表現とどのように関連づけて解釈したのか、十分に明示されてこなかった。音楽科授業を研究対象とした授業分析におけるこのような状況の背景には、逐語記録に基づく授業分析における記述手

法の問題が看過されてきたことがある。

筆者はこれまでもこの問題を意識し、後に検討するよう、逐語記録の記述手法の改良を試みながら授業分析をおこない知見を得てきた(横山 2013, 2014, 2016)。ただし、これらの研究は授業実践における学習経験と指導の過程を研究対象としており、必ずしも逐語記録の記述手法の問題に焦点化したわけではなかった。また、音楽科授業の特質をふまえた逐語記録に基づく授業分析の記述手法に関する研究は管見の限りない。

それでは、授業分析者は、言語表現と非言語表現が組み合わさっている音楽科授業の特質をふまえて、授業分析の基礎資料となる逐語記録をどのように作成すればよいのだろうか。

以上の問題意識から、本研究を音楽科授業の特質をふまえて言語情報と非言語情報を統合的にとらえることのできる逐語記録に基づく授業分析の記述手法の開発の端緒として位置付け、映像記録から逐語記録への転記の段階に焦点化して研究をおこなうことにした。

(2) 研究の目的と方法

本研究の目的は、逐語記録への非言語情報の結合の観点から、音楽科授業の特質をふまえた逐語記録に基づく授業分析の記述手法に関して、映像記録から逐語記録への転記の段階に焦点化して先行研究を検討し、研究の到達点と課題を明らかにすることである。

最初に、音楽科授業を対象とした授業分析における授業実践の特徴と逐語記録の記述手法との関係を検討し、映像記録から逐語記録への転記の段階における問題点をとらえる。続いて、音楽科授業以外の教科授業を分析した先行研究を参照し、授業実践の特徴と分析資料の記述手法との関係を調べる。

以上の検討から視点を心得、筆者の先行研究における逐語記録の記述手法について再検討し、成果と課題を明らかにする。

最後に、研究結果を総括し、音楽科授業の特質をふまえた逐語記録に基づく授業分析の記述手法に関して、逐語記録への非言語情報の結合の観点からみた研究の到達点と課題を明らかにする。

(3) 研究の意義

本研究は、音楽科授業の特質をふまえた逐語記録に基づく授業分析の記述手法を開発する研究の端緒として位置付ける。本研究の成果を基礎として、今後は前述の「三

段階」における、授業実践を撮影し映像記録を作成する第一段階、及び、逐語記録を中心にその他の資料を合わせて分析した結果と解釈を記述する第三段階にも研究範囲をひろげるという研究構想をもっている。

逐語記録に基づく授業分析の記述手法の開発に関する研究の成果は、音楽科授業を対象とした授業研究のみならず、今後さらに一般化するであろう、授業実践の映像記録を活用した現職教員研修や大学教育での授業研究、アクティブ・ラーニングによる授業を研究する分野において、言語表現と非言語表現を統合的にとらえて理解するために、逐語記録に非言語情報を組み合わせて授業を分析する授業研究の新しい可能性という側面から知見を提供する基盤になると考えている。

2 先行研究の検討

(1) 音楽科授業を対象とした授業分析に関する先行研究の場合

音楽科授業を対象とした授業分析に関する先行研究の中から、以下の論文(表 1)を抽出し、授業実践の特徴と逐語記録の記述手法との関係について検討し、問題点をとらえた。

なお、抽出にあたっては、平成 20～21 年度改訂学習指導要領における制度上の区分である表現領域歌唱分野、同領域器楽分野、同領域創作(小学校では音楽づくり)分野、鑑賞領域のそれぞれについて、異なる研究者による研究の特徴的な事例を 2 例ずつ抽出した。ただし、表現領域器楽分野については、先行研究の事例自体が 1 例と限られていたため、内容的に近接する研究として同領域の器楽による音楽づくり分野の事例を抽出した。また、筆者による先行研究は後に改めて検討するため、ここでの検討対象から外している。

表 1 の先行研究の検討結果は、表 2 のとおりである。表 2 を内容とする先行研究の検討結果をふまえて、音楽科授業を対象とした授業分析における先行研究には、映像記録から逐語記録への転記の段階において、以下のような問題点があることがみえてきた。

表 2 中のすべての事例の下線部から明らかなように、最も大きな問題点は、対話や記述など言語活動の様相は逐語記録として転記されているものの、身体表現、造形表現、音楽表現による非言語的な活動の様相を十分に記述できていないことである。

映像記録から逐語記録への転記の段階で授業実践の様相とのずれが生じるという問題は避けて通れない。だか

からこそ、言語情報と非言語情報が渾然一体となっている映像記録からどのような記述手法を用いて分析資料を作成するのかということが、極めて重要な研究上の手続きとなるのである。その意味で、音楽科授業を対象とした授業分析に関する先行研究が、非言語情報をどのように逐語記録と組み合わせて記述するのかという課題を看

過し、言語情報を中心とした逐語記録の作成に依拠してきた結果、言語表現と非言語表現が組み合わさっている音楽科授業実践の様相を統合的にとらえて記述することに成功していないと指摘せざるを得ない。

表 1 音楽科授業を分析した先行研究の事例

番号	領域 (分野)	出典	年号
1	表現 (歌唱)	井上薫「わらべうたによる幼小交流を通じた児童の変化-園児とのかかわり方に着目して-」日本学校音楽教育実践学会紀要『学校音楽教育研究』Vol. 19, pp. 3-13	2015
2	表現 (歌唱)	西條友香「わらべ歌を学習へ発展させる授業構成の視点」日本学校音楽教育実践学会紀要『学校音楽教育研究』Vol. 12, pp. 205-215	2008
3	表現 (器楽)	小川由美「文化的側面を扱うことによる音楽的な教育効果-小学校2年生のトガトンの実践分析を通して-」日本学校音楽教育実践学会紀要『学校音楽教育研究』Vol. 13, pp. 205-214	2009
4	表現 (音楽づくり)	衛藤晶子「探究型音楽学習『こする音色を生かし音楽づくり』における教師の指導性-教師の働きかけを視点として-」日本学校音楽教育実践学会紀要『学校音楽教育研究』Vol. 17, pp. 39-51	2013
5	表現 (創作)	山本祐子「単元『百人一首をつくってうたおう』にみる話す言葉からうたへの変容過程に関する一考察」日本学校音楽教育実践学会紀要『学校音楽教育研究』Vol. 18, pp. 3-12	2014
6	表現 (創作)	兼平佳枝「芸術的探究としての音楽創作授業における子どもの問題解決過程に関する教育実践学的研究-デューイの探究理論を手がかりに-」日本学校音楽教育実践学会紀要『学校音楽教育研究』Vol. 15, pp. 25-37	2011
7	鑑賞	東真理子「音楽鑑賞学習での意味生成における身体の機能-デューイのコミュニケーション論を視座として-」日本教育方法学会紀要『教員方法学研究』第38巻, pp. 25-35	2012
8	鑑賞	小林佐知子「音楽科授業における集団思考成立の条件-小学校1年生の『図形楽譜づくり』の場合-」日本学校音楽教育実践学会紀要『学校音楽教育研究』Vol. 19, pp. 27-38	2015

表 2 表 1 の先行研究の検討結果(下線は筆者による)

番号	授業実践の特徴と記述手法の関係	問題点
1	わらべ歌で遊びながら、指導内容「問答」について対話を通して思考する活動。映像記録を逐語記録に転記。抽出児童の発言に下線を添付。	抽出児童が「どのように言葉や動作や表情等で働きかけているか、という点からB児の行動を追っていく」(p. 7)とあるが、 <u>発話中心の逐語記録</u> となっている。
2	わらべ歌で遊びながら、指導内容「はねるリズムとはねないリズム」に意識を向け、リズムをいかしてお手合わせしたり歌ったりする活動。映像記録、ワークシートやノートの記述を分析資料としているが、逐語記録は作成されていない。	抽出児童2名の「わらべ歌へのかかわり方が、わらべ歌遊びのときと、構成活動のときでどのように変化したか」(p. 208)をみていくとあるが、 <u>児童の音楽表現活動が全て言語記述の形で提示</u> されているため、活動の動的な様相をとらえにくい。

音楽科授業の特質をふまえた逐語記録に基づく授業分析における記述手法の検討

3	トガトンでリズム遊びをしながら、カリンガ族の演奏風景を参考に、音色やリズムの組み合わせを工夫して演奏する活動。言葉や描画によるワークシートの記述、教師の提示情報、断片的な発話記録を掲載。	<u>授業記録が明確に提示されず、解釈の記述の中で分析資料が提示されている。音楽の文化的側面や形式的側面の理解が音楽表現活動を変化させるという仮説に基づき分析しているが、分析単位が理解しようとする個ではなくグループとなっている。</u>
4	身近な素材をこすってさまざまな音色を鳴らし、ペアで音色の会話を楽しみながらイメージを表現する音楽をつくる活動。録画記録に基づく発話記録、ワークシートの記述内容を分析の資料としている。記録に多く残っていた児童グループを抽出し、逐語記録内の注目すべき発言に下線をつけてカテゴリー化し解釈している。	児童らは音を鳴らしながら対話を続けており、その様子が逐語記録に記述されているが、 <u>児童の音楽表現活動が全て言語記述の形で提示されているため、活動の動的な様相をとらえにくい。</u>
5	戸外で百人一首の創作の素材を集めて短歌を創作し、創作した短歌に抑揚をつけて歌う活動。映像記録を基に、発話・行動・音楽表現を分析。ワークシートの記述も分析資料としている。	<u>授業記録が明確に提示されず、解釈の記述の中で分析資料が提示されている。「うたい方の変化に伴って、内的世界のイメージはどのように形成され発展していったか」(p.6)を分析視点としているが、演奏の採譜に添付された強弱記号や補足説明の記述は執筆者によるものであり、子ども自身による記述ではない。</u>
6	歌舞伎の黒御簾音楽における雨と雪の表現を参考にイメージをふくらませ、「かさこじぞう」の物語に合った音楽をつくる活動。映像記録を逐語記録に転記。個を抽出し、逐語記録内の注目すべき発言に下線をつけてカテゴリー化し解釈している。	逐語記録に基づき、抽出児童の音楽創作における問題解決の過程を明らかにしている。発話中心の逐語記録に音楽表現に関する行動や音響構成の仕方が反映されていないため、発話から解釈できる抽出児童の思考過程と外に表れる音楽表現との関係が不明瞭である。
7	盆踊りを体験し、「はねるリズム」を感じ取ってグループ内で足取りを工夫し盆踊りをつくりかえる活動。映像記録に基づき抽出グループに関する分析表を作成。	意味生成における身体の機能を観点として分析表を作成し授業を分析しているが、 <u>分析結果を総合的に記述した分析表の根拠となる授業記録の作成について明示されておらず、分析結果の妥当性を問うことができない。</u>
8	鑑賞教材曲を聴きながら図形楽譜をつくり、図形楽譜を見ながら音楽について感じ取ったことを交流し、紹介文を書く活動。映像記録に基づき逐語記録を作成し、逐語記録内の注目すべき発言に下線や網掛けをつけてカテゴリー化し解釈している。	「図形楽譜づくり」による鑑賞授業では、図形楽譜と音楽と発話の関係が重要になってくるが、 <u>逐語記録には児童が作成した図形楽譜や聴いている音楽が十分に可視化されていない。</u>

(2) 関連研究の参照

それでは、音楽科授業以外の教科授業には、どのような授業実践の特徴があり、授業分析に際して分析資料がどのように作成されているのだろうか。音楽科以外の教科授業を分析している関連研究(表 3)を参照し、授業実践の特徴と授業分析における分析資料の記述手法との関係を調べる。検討した先行研究において分析されている授業実践は、国語科や社会科のように言語活動が軸となる教科、図画工作・美術科や体育科のように造形や身体パフォーマンスが軸となる教科である。

表 3 の先行研究の検討結果は、表 4 のとおりである。表 4 を内容とする関連研究の参照をふまえると、いずれの関連研究においても、筆者が表 4 中に示した下線部か

ら言えることだが、映像や音声の記録から言語情報を抽出した逐語記録や教師や子どもによる記述の記録など、言語情報を中心とした記録を文字化して記述するという手法をとっている。

つまり、映像記録から逐語記録を作成し主な分析資料としている点では音楽科授業の場合と同様であり、必ずしも教科の特質は考慮されていないと言える。

ただし、番号 3 の図画工作の事例では、論文中に学習者の活動の様子を撮影した写真を添付する形で造形パフォーマンスの様子が提示されている。これは、執筆者が逐語記録だけでは伝えきれない授業実践の生き生きとした様相を伝えたいという意図から、補助的な資料として添付したと考えられる。

表 3 他教科の授業を分析した関連研究

番号	教科	出典	年号
1	小学校 4 年生/国語科	一柳智紀「児童の話し方に着目した物語文読解授業における読みの生成過程の検討-D. パーンズの『探求的会話』に基づく授業談話とワークシートの分析-」日本教育方法学会紀要『教員方法学研究』第 38 巻, pp. 13-23	2012
2	高等学校 3 年生/日本史	堀田貴之「総合社会科の原理にもとづく評価指標の開発-高等学校における授業記録の分析をもとにした探索的研究-」日本教育方法学会紀要『教員方法学研究』第 40 巻, pp. 27-37	2014
3	小学校 3 年生及び 4 年生/図画工作	大泉義一「図画工作・美術科の授業における教師の発話に関する実践研究-図画工作・美術科の授業を構成する『第 3 教育言語』への着目-」美術科教育学会紀要『美術教育学』32 巻, pp. 69-83	2011
4	小学校 4 年生/体育科	加登本仁・大後戸一樹・木原成一郎「小学校体育科のボール運動の授業における学習集団の形成過程に関する事例研究-エンゲストロームの活動理論を手がかりとして-」日本教育方法学会紀要『教員方法学研究』第 39 巻, pp. 83-94	2013

表 4 表 3 の関連研究の参照(下線は筆者による)

番号	授業実践の特徴	分析資料の記述手法
1	物語文の読解において多様な読みの生成をねらい、呼んで感じたことを書き、全体で交流する活動。	映像記録とメモから <u>逐語記録</u> を作成。 <u>教師と児童の対話的活動を逐語記録として記述し、解釈</u> している。
2	戦後日本の自動車産業の歴史に対する認識を深めることをねらい、ワークシートに書いた内容を小人数グループ内で相互交流し、話し合いながら自分の考えを再構成する活動。	執筆者が「生徒の活動・作業」を要約的に記述している。 <u>ワークシートによる記述内容の分析と解釈</u> が中心である。
3	子ども同士で素材から喚起されるイメージを交流しながら、新しい造形表現を生み出したり造形表現を工夫したりする活動。	映像記録と音声記録に基づき、 <u>教師の発話に着目して逐語記録を記述し、解釈</u> している。授業風景の紹介として、造形活動の様子がわかる写真が一枚添付されている。
4	チーム内で相手の動きを予想したり作戦を立てたりする話し合い活動を軸にフラッグフットボールのゲームをおこなう活動。	授業分析の材料となる資料収集の手続きと内容が詳しく明示されている。 <u>映像記録と音声記録に基づき逐語記録を作成</u> している。 <u>教師の指導言と子どもの発話から作成した逐語記録、ゲーム無記録用紙、単元開始時と終了時のテスト、調査票を分析の資料</u> としている。

3 筆者の先行研究における逐語記録の記述手法の検討

(1) 検討の視点

以上の検討により、言語表現と非言語表現が組み合わさった音楽科授業の映像記録から、何らかの記述手法を用いて授業分析の基礎資料を作成する場合、言語情報を抽出した逐語記録だけでは不十分であり、逐語記録に非言語情報を組み合わせて記述する手法を開発する必要があることを明確にした。

そこで次に、映像記録にある言語情報と非言語情報をどのように統合的に記述しようとしているかという視点から筆者の先行研究を再検討し、逐語記録に非言語情報を組み合わせて記述する手法に関する成果と課題をとらえ直す。

筆者の先行研究の一覧は表 5 のとおりである。先行研究においておこなった授業分析のすべては、「三段階」を授業分析上の手続きとしている。

表 5 の先行研究の検討結果は、表 6 のとおりである。

以下、筆者の先行研究の検討結果について述べる。

(2) 逐語記録の記述手法の特徴

筆者の先行研究における逐語記録の記述手法の特徴は、前半期(表5の番号1, 2, 3)と後半期(表5の番号4, 5, 6)に分けられる。すなわち、前半期は従来型の逐語記録の作成、後半期は逐語記録に非言語情報を取り入れるかという問題意識から逐語記録を改良し授業分析の基礎資料を作成しているという特徴がある。

研究の前半期においては、逐語記録は基礎資料として提示されていない。映像記録に基づく発話記録、ワークシートの記述、教師が作成した掲示物を主な分析資料として論述の中で必要に応じて提示し、それらを解釈している。一方、研究の後半期になると、資料A、資料B-1, B-2、資料Cのような記述手法を用いて逐語記録を作成し、授業分析の基礎資料としている。

例えば資料Aは、4人グループで各自が箏を奏で、イメージを出し合い協同で音楽を創作する活動の中で、話し合いながら演奏表現を工夫している場面の逐語記録である。生徒らは自分が創作した旋律を箏を奏で、こうした方がいい、こうしてみようか等、話し合って演奏をつくりかえている。この場面において、言葉と音楽は一連の対話のように連なっている。このように言語表現と非言語表現が相互関連しながら学習過程が展開している場面を記述するには、言語情報を抽出した逐語記録の記述手法では物足りない。そこで、できる限り忠実に生徒の演奏を採譜しその楽譜を挿入するという記述手法を用いて逐語記録を改良している。

資料Bは、「図形楽譜づくり」による音楽鑑賞の授業実践³⁾における冒頭場面の学習記録である。単元全体の流れとしては、最初に、音楽を聴いて感じたり考えたりしていることを生徒らが抽象的な図形に置き換え、音楽を聴きながら図形楽譜をつくる。そして、つくった図形楽譜を全員で見合いながら、「最初の旋律がきらきらしていて、魚がゆらゆら泳いでいるような感じがしたので、この図形の組み合わせにしました」など音楽の雰囲気と表した図形楽譜を関連付けて説明したり、他の図形楽譜について質問したりする。最後に図形楽譜を見ながら音楽を聴き、批評文を書く。このように、単に音楽を聴いて感想文を書く静的な音楽鑑賞の授業ではなく、図形楽譜をつくったり質疑応答したりする等、活動的な音楽鑑賞の授業の映像記録を観察すると、生徒らは旋律を口ずさんだり、音楽に合わせて体を揺らしたり、音楽を聴き

ながら図形楽譜をつくったりというように、多様な活動をおこなっていることがわかる。そのような活動の豊かな様相を可能な限り転記するために、逐語記録(資料B-1)の記述に発話・行動・図形をカテゴライズした記号(資料B-2)を付与するという記述手法を試行的に取り入れている。

資料Cは、規則的なリズムと不規則なリズムを組み合わせ、空き箱を打ち鳴らして音楽をつくっている場面の逐語記録である。生徒Aの活動に着目して逐語記録を作成するとともに、生徒Aがリズムの特徴について感じ取ったことを絵に表した描画資料、生徒Aが即興的に打ち鳴らしたリズム演奏を採譜した楽譜を添付している。このように、時系列に記述された言語情報中心の逐語記録に対応する形で非言語情報である描画や演奏を採譜した楽譜を添付する手法により、この学習場面における活動の様相が可能な限り表現できるように工夫している。

(3) 筆者の先行研究における成果と課題

以上の検討をふまえて、逐語記録に非言語情報を組み合わせて記述する手法に関する、筆者の先行研究における成果と課題をとらえ直す。

成果としては、映像記録にある言語情報と非言語情報を統合的にとらえて分析するために、逐語記録に非言語情報を組み合わせて記述する具体的な手法を試行的にはあるが提示していることがあげられる。子どもの演奏の採譜を逐語記録内に挿入する手法(資料A)、発話・行動・図形をカテゴライズした記号を逐語記録の記述に付与するという手法(資料B)、時系列に記述された言語情報中心の逐語記録に明確に対応する形で非言語情報である描画や演奏の採譜を添付し、解釈の証拠を明示する手法(資料C)である。

このように、筆者が授業分析による授業研究において逐語記録の記述手法の改良を試行するようになった背景には、口ずさむ・音を鳴らす・身振り手振りで音楽の抑揚を表す・メロディーラインを線で描画する等の非言語情報を可能な限り逐語記録と組み合わせて記述しなければ、映像記録から転記した逐語記録が授業実践の生き生きとした事実から離れてしまうのではないかという問題意識があった⁴⁾。

一方、筆者による逐語記録に非言語情報を組み合わせた記述手法は試行的な要素が強く、今後も改良の余地が大いに残っている。同時に、それらの記述手法は他の授業分析者も使える一般化可能なツールとなり得るのかど

うか、複数の授業分析者によって検証される必要がある。

表5 筆者の先行研究リスト

番号	出典	年号	資料
1	「中学校におけるわらべうた遊びの教材化の可能性-『構成的音楽表現』を原理とする授業構成-」 日本学校音楽教育実践学会「学校音楽教育研究」第14巻, pp. 239-250	2010	
2	「中学校音楽科鑑賞領域の授業における『批評』のルーブリック開発の視点-『逆向き設計』論 を活用した単元の再設計を通して-」、教育目標・評価学会紀要「教育目標・評価学会紀要」第 21号, pp. 67-77	2011	
3	小島律子との共著「パフォーマンス課題における音楽的思考の質的評価」、大阪教育大学紀要「大 阪教育大紀要」第V部門教科教育第61巻第1号, pp. 59-72	2012	
4	「『協働』の観点からみた構成的音楽表現活動における個の表現の様相-中学校特別支援学級での 箏を使った創作授業の分析-」、日本学校音楽教育実践学会紀要「学校音楽教育研究」第17 巻, pp. 65-76	2013	A
5	「社会的相互作用の影響の観点からみた個のイメージの構成過程-『図形楽譜づくり』を教材と した音楽科鑑賞領域の授業の分析-」、日本教育方法学会紀要「教育方法学研究」第39巻、2013 年度, pp. 13-24	2014	B-1 B-2
6	「『構成活動』を原理とした音楽科授業における遊びから学習への連続性-中学校特別支援学級で の事例の分析を通して-」、日本学校音楽教育実践学会紀要「学校音楽教育研究」第20巻, pp. 3-14	2016	C

表 6 表 5 の先行研究の検討結果

番号	授業実践における活動の特徴	視点:映像記録にある言語情報と非言語情報をどのように統合的に記述し逐語記録を作成しているか	資料
1	表現領域創作分野の授業実践。わらべうた遊びを通して感じ取ったことを生かして、箏による協同の音楽創作をおこなう活動。	逐語記録は分析資料として提示されていない。映像記録に基づく発話記録、ワークシートの記述、教師が作成した掲示物を主な分析資料として論述の中で必要に応じて提示し、それらを解釈している。	
2	音楽表現活動を取り入れた鑑賞領域の授業実践。日本の民謡をリズムをとって歌い、感じ取ったことを記述し、批評文を書く活動。		
3	表現領域歌唱分野の授業実践。盆踊りの「返し言葉」をつくりかえながら郷土の盆踊りを歌い踊る活動。		
4	表現領域創作分野の授業実践。4人グループで各自が箏を奏でながらイメージを出し合い、話し合いながら協同で音楽を創作していく活動。	特定の場面について映像記録にもとづく逐語記録を作成し、逐語記録の中に生徒の演奏を採譜した楽譜を挿入している。 逐語記録の他に、抽出生徒へのインタビューの記録、ワークシート等の記述を分析資料として論述の中で必要に応じて提示し、それらを解釈している。	A
5	「図形楽譜づくり」による鑑賞領域の授業実践。音楽を聴いて感じたり考えたりしていることを生徒らが抽象的な図形に置き換え、音楽を聴きながら図形楽譜をつくる活動。	特定の場面について逐語記録(資料 B-1)を作成し、その記述に発話・行動・図形をカテゴライズした記号(資料 B-2)を付与するという記述手法を取り入れている。	B-1 B-2
6	表現領域創作分野の授業実践。規則的なリズムと不規則なリズムを組み合わせ、空き箱を打ち鳴らして音楽をつくる活動。	生徒 A の活動に着目して逐語記録を作成するとともに、生徒 A がリズムの特徴について感じ取ったことを絵に表した描画資料、生徒 A が即興的に打ち鳴らしたリズム演奏を採譜した楽譜を添付している。	C

資料 A 逐語記録内に生徒の演奏の採譜を挿入した事例 (2013-a, pp. 71-72)

資料 A の楽譜は、生徒 C と D の演奏の採譜を逐語記録内に挿入した事例を示しています。楽譜は「C/D 7」と「D19」の2つの部分に分かれています。楽譜には、生徒の演奏の採譜が挿入されており、その下には生徒の発言が記されています。

「C/D 7」の楽譜には、生徒 C と D の演奏の採譜が挿入されています。楽譜の下には、生徒 A, B, C, D の発言が記されています。

「D19」の楽譜には、生徒 D の演奏の採譜が挿入されています。楽譜の下には、生徒 C と D の発言が記されています。

生徒の発言 (A8-C18):

- A8: ずっと生徒 C・生徒 D の側で意見している。言葉は授業者から聞き取れない。
- A9: 2人いっしょにやらずに、Dくんだけやったほうがつなぎやすい。
- D10: つまり、いっしょにやらないほうがいいってこと?
- B 11: (授業者の指示で筆を移動していた生徒 B が議論の輪に加わる。)
- A12: そう。いっしょにやると激しすぎる。
- D13: じゃあ、まずぼくやって。
- C14: で、次におれがやってって感じ?
- D15: で、ぼくがやって。
- A16: そう、それでもいいよ。
- D17: じゃ、いっぺんやってみよう。
- C18: よし、まず…。

生徒の発言 (C20-D21):

- C20: で、えーっと。
- D21: いっせーの一ーで。

生徒の発言 (C22-C23):

- C22: (C/D22)
- C23: (C/D22)

資料 B-1 逐語記録にカテゴリ化した記号を付与した事例 (2014-a, p. 18)

発言番号	第2分節の逐語記録前半の抜粋
T34	黒い台紙に貼られた□と○の形状をした白色の紙片を手を持って見せる。
A, B, C, D 35	▲★生徒全員が無言でその方向を見る。
T36	Tは「どっちの形が主題に合っているか、ちょっと選んでみようか?」と全員に問いかける。
T37	問いかけに続けて♪パン、パン、パン…、と主題の旋律をオノマトペでロズさみ手でリズムもとる。
A, C, D38	▲A、C、DはTの方向を見て聴くが、
B38	Bはずっとうつむき、聴いているのかわからない。
C39	Tがロズさみ始めると、すぐにCが「ボールがはねとる感じやで…」とつぶやく。
A40	★Aは掲示された□と○の紙片の方をじっと見ながら、T35のロズさみに合わせて旋律に言葉をあてはめて♪まる、まる、まる…と、ロズさみながら同時に身体も揺らす。
D40	部分的にTのロズさみに合わせて「パンパン」とつぶやきながら、時々頭でリズムをとって聴いている。他の生徒の様子もうかがっている。
T41	2人で相談して…。
A42	まる、まる、まる!
T43	Aに向かって「理由が欲しい。」
A48	▲AはBの顔を覗き込み「Bさん、まるにしよ!」と強い口調で言う。
B49	ここでBは初めてAと目を合わせて「いいよ。」と表情を変えずにつぶやく。
C50	Aに向かって「理由は?」
A51	▲Tに向かって「**えーっと、まりつきみたいに…」と言いよどみ、 ♪パン、パン、パン…、と主題の旋律をオノマトペでゆっくりロズさみながらそのリズムに合わせて手も上下に動かす。

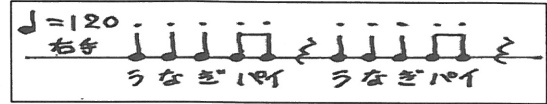
資料 B-2 発話・行動・図形をカテゴリ化した記号 (資料 B-1 の逐語記録に付与) (2014-a, p. 17)

記号	記号の意味	記号	記号の意味
♪斜体文字	オノマトペによる旋律のロズさみ	発話に続く…	発話が終止を待たずに消失
♪斜体文字	オノマトペ以外の旋律のロズさみ	**斜体文字	フィラー ²⁰⁾
♪♪	音楽が鳴っている	▲	Aが人を見る行為
□ ○	授業者が提示した色紙の紙片	★	Aがものを見る行為
!	発話における強い言い切りの口調	破線	音楽表現を伴わない身体動作
?	上昇声調の終止	二重鎖線	音楽表現を伴う身体動作
「斜体文字」	発話	破線	図形楽譜をつくる造形行為

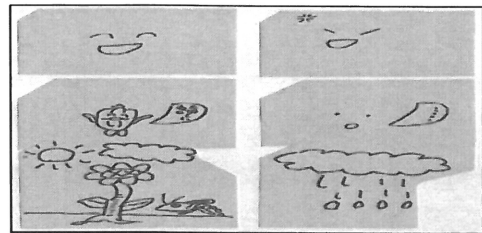
資料C 逐語記録に描画や演奏の採譜を添付し解釈の証拠を明示した事例
(2014-a, p. 18)

番号	発話・行動・音を出す行為や音楽表現の記録
A1	規則的なリズムを即興的に鳴らす。
A2	「クイズ。さて、何のことを言っているでしょう。」
T3	「えっ。このリズムの裏に何か隠されているのですか。」
A4	「答え。うなぎパイ。」と言い、1音節に1音を対応させてリズムをとって鳴らす。
T5	「なるほど。心の中で言葉を言いながらリズムを作ったんだよね。バラバラだった音も、少しリズムを意識すると、ちょっと変わってきますね。では、次はみんなに付箋を配ります。」
A6	強い口調で「ええっ!」
C7	「何を書くの?」
T8	付箋を貼るスケッチボードを見せながら、「これを見て下さい。紙相撲でやった時の音はリズムがない。そして、今、一人ひとりが、リズムが…」
A9	「ある」
T10	「リズムがある音を鳴らしたでしょ。その時に、心の中に浮かんだこと。どんなことを思い浮かべたかな。どんな様子を思い浮かべたかな。」
C11	「はい。」
T11	「こののを、書いてください。」
A12	「顔文字で表現しても良いですか。」
C13	「楽しい感じがする。」
T14	「そうだね。例えば楽しい感じがする。絵で表現したい?」
A15	「うん、これに顔書いていい?」
T16	「いいです。絵とか、風景とか、あと何だろう。気持ちとか、そういうものを書いてみよう。まず、リズムのない時。先生が打つので、…。どんなことを感じるか。どんなことを思い浮かべるか。気持ちとか、様子とか、絵とか、書いてみて下さい。いくよ。」紙相撲の音のリズムで箱を鳴らす。
全員 17	付箋に書き始める。
C18	「楽しい感じ。」
A19	書いた付箋を見せて、「先生、これリズムのある絵。」
T20	叩きながら、「これ、リズムがない。」
A21	「なしは、こんな顔。」
T22	紙相撲の音のリズムで箱を鳴らしながら、「どんな感じがする?」
C23	「なんか、リズムがない感じがする。」
A24	「はい、できました。」と言ってボード(小黒板)に付箋を貼り、遠目で満足そうに眺める。
T25	「Aくん、リズムのある音、鳴らしてみて。」
A26	「はい。」すぐにTの側で規則的なリズムを即興的に鳴らし始める。
A27	紙相撲の音のリズムを鳴らし続けていたが、突然「連打ゲーム!」と言う。Tと視線を合わせて「よくメタルゲームで連打をする時あるやろ。小さい子が、ポケモン戦隊でいっぱい連打しとるやん。」身体をゆずって「ん!?!」
T28	「リズムがない時の音を連打って言うんだね。」と言い、ボード(小黒板)に「連打」と書く。

採譜③ 生徒Aによる「うなぎパイ」の演奏



資料① 生徒Aが描いた顔文字



規則的なリズムに対応した顔文字 紙相撲の音のリズムに対応した顔文字

採譜④ リズムを意識した音楽表現

3 結論

(1) 研究結果の要約

本研究の目的は、非言語情報の逐語記録への結合の観点から、音楽科授業の特質をふまえた逐語記録に基づく授業分析の記述手法について、特に映像記録から逐語記録への転記の段階に焦点化して先行研究を検討することであった。

そのために、最初に音楽科授業を対象とした授業分析における授業実践の特徴と逐語記録の記述手法との関係について先行研究を検討し、次のような課題を明らかにした。音楽科授業を対象とした授業分析においては、言語情報と非言語情報が渾然一体となって記録されている映像記録からどのような記述手法を用いて授業分析の基礎資料を作成するのかということが、極めて重要な研究上の手続きとなる。しかし、検討した先行研究は、逐語記録に非言語情報をどのように組み合わせて記述するかという課題を看過してきた。その結果、言語表現と非言語表現が組み合わさっている音楽科授業実践の様相を統合的にとらえ授業分析の基礎資料として記述することに成功していない。

次に、音楽科授業以外の教科授業を分析した先行研究を参照し、各教科授業実践の特徴と分析資料の記述手法との関係を調べた。その結果、映像記録から逐語記録を作成し主な分析資料としている点では、必ずしも教科の特質は考慮されていないことがわかった。

以上の検討をふまえて、映像記録にある言語情報と非言語情報をどのように統合的に記述しようとしているかという視点から筆者の先行研究を再検討し、逐語記録に非言語情報を組み合わせて記述する手法に関する成果と課題をとらえ直した。

成果としては、子どもの演奏を採譜した楽譜を逐語記録に挿入する手法、発話・行動・図形をカテゴライズした記号を逐語記録の記述に付与する手法、逐語記録に描画や演奏の採譜を添付し解釈の証拠を明示する手法のように、映像記録にある言語情報と非言語情報を統合的にとらえ分析するために、逐語記録に非言語情報を組み合わせて記述する手法について授業分析を通して事例を蓄積させてきたことを確認した。一方で、それらの記述手法は試行的要素が強く、検証や再改良の必要があるという課題があることを確認した。

(2) 研究の総括

以上に要約した研究結果を総括し、音楽科授業の特質

をふまえた逐語記録に基づく授業分析の記述手法に関して、逐語記録への非言語情報の結合の観点からみた研究の到達点と課題を明らかにする。

本研究において一貫して強調してきたように、音楽科授業の特質は言語表現と非言語表現が組み合わさっている点にある。このことから、音楽科授業を対象とした授業分析においては、授業における諸事象を言語及び非言語の統合的な情報として把握できる映像記録が重要視されてきた。

映像記録を観察し記録された教師や子どもの活動を直接解釈すると、解釈の根拠が明示されず解釈した内容に対してその根拠や妥当性を問うことができなくなる。そこで、映像記録を丁寧に観察し、関わり合い学び合う教師や子どもの諸活動の様相をできるだけ捨象せず詳細に記述し、逐語記録に転換するのである。授業における学習経験と指導の過程で子どもの心の動きに何が起こっているのか、逐語記録を授業分析の基礎資料とすることによって、科学的な授業研究が可能になる。この点に、逐語記録を作成し逐語記録を基礎資料として授業分析をおこなうことの学術的な価値が存在する。その意味で、授業分析に基づく音楽科授業の実践的研究が、映像記録に基づいて逐語記録を作成し、逐語記録を中心にその他の資料も合わせながら授業を分析し洞察を得てきたことについては、高く評価されるべきである。

したがって、音楽科授業の特質をふまえた逐語記録に基づく授業分析の記述手法に関する研究の到達点として、言語情報と非言語情報を統合的に把握できる映像記録を重視する授業研究の方法を定着させてきたこと、映像記録を観察し詳細な記述によって作成された逐語記録を授業分析の基礎資料とすることにより洞察が得られてきたことがあげられる。

一方で、逐語記録というのはあくまでも言語情報を抽出し文字化した記録である。子どもの発言と教師の発問を軸に学習過程が成立するような授業実践ならば、授業分析における必須の基礎資料として逐語記録が十分に機能するであろう。しかし、音楽科授業では、教師や子どもの身体的、音楽的なパフォーマンスが前面に出る。それは必ずしも言語を介さない非言語的な活動である。そのような音楽表現活動の動的な様相に、表現しようとする子どもの心の動きがどのように関わっているのか、授業における外的な表現と内的な心の動きを関連づけて解釈するためには、どうしても言語情報と非言語情報を統合的に記述できるような授業分析の記述手法の開発が必

要になってくる。これまでも、本研究で検討した拙稿(2013, 2014, 2016)のように授業分析を通じた研究の中で逐語記録の改良を試行した研究はあるが、逐語記録にどのように非言語情報を組み合わせて記述していくかという観点から、授業分析の記述手法の開発に焦点化した研究はなかった。

したがって、音楽科授業の特質をふまえた逐語記録に基づく授業分析の記述手法に関する研究上の課題として、第一に非言語情報を逐語記録と組み合わせる記述手法の開発に、音楽科授業の分析を通して取り組んでいくことがあげられる。第二に、逐語記録に非言語情報を組み合わせて記述した、音楽科授業の分析における様々な記述手法の開発事例を蓄積することがあげられる。

(3) 今後の研究課題

今後の研究課題を二つあげる。第一の課題は、音楽科授業の特質をふまえて逐語記録に非言語情報を組み合わせて記述し授業分析の基礎資料を作成する際の要点は何か、学習者や学習集団の特性、授業実践のねらい、授業分析の目的、等が異なる授業実践の事例に応じて、どのような記述手法が取捨選択されるべきなのかといった具体的な問いに対して、様々な種類の実践事例の分析を通してこたえていくことである。

第二の課題は、授業実践を撮影し映像記録を作成する第一段階、及び、逐語記録を中心にその他の資料を合わせて分析した結果と解釈を記述する第三段階にも検討範囲を広げて研究し、音楽科授業の特質をふまえた逐語記録に基づく授業分析における記述手法の開発の全体像を描き出すことである。

注

- 1) ビデオカメラを用いて撮影された映像記録には、動画と静止画の両方が含まれるが、本研究における「映像」とは、撮影した状態のまま編集されていない動画を指している。
- 2) 逐語記録に基づく授業分析の研究方法は、重松鷹泰(1961)以来、名古屋大学教育方法学研究室において継続して追究されてきた。逐語記録に基づく授業分析の学術的価値については、次の文献における柴田好章の論述を参照。柴田(2013)「第2章 授業分析による理論構築と授業過程の可視化手法」的場正美・柴田好章編『授業研究と授業の創造』溪水社, pp. 21-39
- 3) 「図形楽譜づくり」による音楽鑑賞の授業は、日本

学校音楽教育実践学会における「生成の原理」による授業づくりプロジェクトの場で提案され、実践がひろがっている。兼平佳枝他(2010)『構成活動』としての〈図形楽譜づくり〉を通して」日本学校音楽教育実践学会紀要『学校音楽教育研究』Vol. 14, pp41-48

- 4) 音楽科授業を対象として逐語記録に基づく質的な授業分析を行う場合の、非言語情報の重要性については、次の拙稿の中で論じている。拙稿(2015)「2. 事実に基づく授業研究・授業分析」小島律子編著『シリーズ 新時代の学びを創る 6 音楽科 授業の理論と実践 生成の原理による授業の展開』あいり出版, pp. 134-142

引用・参考文献

- 東真理子(2012)「音楽鑑賞学習での意味生成における身体の機能-デューイのコミュニケーション論を視座として-」日本教育方法学会紀要『教員方法学研究』第38巻, pp. 25-35
- 衛藤晶子(2013)「探究型音楽学習『こする音色を生かし音楽づくり』における教師の指導性-教師の働きかけを視点として-」日本学校音楽教育実践学会紀要『学校音楽教育研究』Vol. 17, pp. 39-51
- 堀田貴之(2014)「総合社会科の原理にもとづく評価指標の開発-高等学校における授業記録の分析をもとにした探索的研究-」日本教育方法学会紀要『教員方法学研究』第40巻, pp. 27-37
- 一柳智紀(2012)「児童の話し方に着目した物語文読解授業における読みの生成過程の検討-D. バーンズの『探求的会話』に基づく授業談話とワークシートの分析-」日本教育方法学会紀要『教員方法学研究』第38巻, pp. 13-23
- 井上薫(2015)「わらべうたによる幼小交流を通じた児童の変化-園児とのかかわり方に着目して-」日本学校音楽教育実践学会紀要『学校音楽教育研究』Vol. 19, pp. 3-13
- 兼平佳枝(2011)「芸術的探究としての音楽創作授業における子どもの問題解決過程に関する教育実践学的研究-デューイの探究理論を手がかりに-」日本学校音楽教育実践学会紀要『学校音楽教育研究』Vol. 15, pp. 25-37
- 加登本仁・大後戸一樹・木原成一郎(2013)「小学校体育科のボール運動の授業における学習集団の形成過程に関する事例研究-エンゲストロームの活動理論を手がかりとして-」日本教育方法学会紀要『教員方法学研究』

- 第 39 卷, pp. 83-94
- 小林佐知子(2015)「音楽科授業における集団思考成立の条件-小学校 1 年生の『図形楽譜づくり』の場合-」日本学校音楽教育実践学会紀要『学校音楽教育研究』Vol. 19, pp. 27-38
- 小島律子・横山真理(2012)「パフォーマンス課題における音楽的思考の質的評価」、大阪教育大学紀要「大阪教育大紀要」第 7 部門教科教育第 61 巻第 1 号, pp. 59-72
- 小川由美(2009)「文化的側面を扱うことによる音楽的な教育効果-小学校 2 年生のトガトンの実践分析を通して-」日本学校音楽教育実践学会紀要『学校音楽教育研究』Vol. 13, pp. 205-214
- 大泉義一(2011)「図画工作・美術科の授業における教師の発話に関する実践研究-図画工作・美術科の授業を構成する『第 3 教育言語』への着目-」美術科教育学会紀要『美術教育学』32 巻, pp. 69-83
- 大谷尚(2000)「授業記録(Document of Instruction)」日本教育工学会編『教育工学事典』実教出版, pp. 271-272
- 西條友香(2008)「わらべ歌を学習へ発展させる授業構成の視点」日本学校音楽教育実践学会紀要『学校音楽教育研究』Vol. 12, pp. 205-215
- 重松鷹泰(1961)『授業分析の方法』明治図書
- 山本祐子(2014)「単元『百人一首をつくってうたおう』にみる話す言葉からうたへの変容過程に関する一考察」日本学校音楽教育実践学会紀要『学校音楽教育研究』Vol. 18, pp. 3-12
- 拙稿(2010)「中学校におけるわらべうた遊びの教材化の可能性-『構成的音楽表現』を原理とする授業構成-」日本学校音楽教育実践学会「学校音楽教育研究」第 14 巻, pp. 239-250
- 拙稿(2011)「中学校音楽科鑑賞領域の授業における『批評』のルーブリック開発の視点-『逆向き設計』論を活用した単元の再設計を通して-」、教育目標・評価学会紀要「教育目標・評価学会紀要」第 21 号, pp. 67-77
- 拙稿(2013)「『協働』の観点からみた構成的音楽表現活動における個の表現の様相-中学校特別支援学級での箏を使った創作授業の分析-」、日本学校音楽教育実践学会紀要「学校音楽教育研究」第 17 巻, pp. 65-76
- 拙稿(2014)「社会的相互作用の影響の観点からみた個のイメージの構成過程-『図形楽譜づくり』を教材とした音楽科鑑賞領域の授業の分析-」、日本教育方法学会紀要「教育方法学研究」第 39 巻、2013 年度, pp. 13-24
- 拙稿(2016)「『構成活動』を原理とした音楽科授業におけ

る遊びから学習への連続性-中学校特別支援学級での事例の分析を通して-」、日本学校音楽教育実践学会紀要「学校音楽教育研究」第 20 巻, pp. 3-14

追記.本研究で取り上げた筆者による先行研究における授業実践事例の扱いについては、関係する生徒及びその保護者に対して、授業記録の使用許可を依頼し承諾を得ています。紙面を借りて感謝申し上げます。

the Description Technique of Transcript-Based Lesson Analysis on the
Characteristics of Music Lessons
—From the Perspective of Combining Nonverbal Information with a
Transcript—

YOKOYAMA, MARI

Abstract

This study aims to examine previous research on the description technique of transcript-based lesson analysis of the characteristics of music lessons, from the perspective of combining nonverbal information with a transcript.

—The analysis results are as follows: Previous studies have emphasized importance of video data in analyzing both verbal and nonverbal information on the characteristics of music lessons. Video data are not directly analyzed, but they are transcribed into a transcript, which is then analyzed in detail. However, nonverbal information in video data is not easy to describe in a transcript. Because the description in a transcript focuses on verbal information, there is little research from the perspective of combining nonverbal information with a transcript. Therefore, it is necessary to develop a description technique that could combine nonverbal information with a transcript to analyze music lessons.—In addition, it is important to collect various development cases on music lesson analysis, that describe combining nonverbal information with a transcript.

Keywords: music lesson, transcript-based lesson analysis, description technique, nonverbal information